

一般共同研究プロジェクト

タイ文化圏における山地民の歴史的研究

2009 年度第 3 回研究会

日時： 2009 年 6 月 13 日（土）午後 13：00～18：00

場所： AA 研セミナー室（301）

報告： 西谷 大氏（国立歴史民俗博物館 准教授）

「多民族が暮らす雲南省者米谷の生業と市－生業戦略からみた市の成立」

研究会開催の趣旨

タイ文化圏において、14 世紀初めから定期市の存在したことが史書から確認されている。定期市が盆地住民と山地民の経済活動を結ぶ場として機能していた点はこれまでも指摘されている。盆地の水田耕作は平常的な余剰を生み、タイ系民族政権の中心地などに建設された城郭都市の維持を可能にしたが、山地の焼畑耕作は移動生活を頻繁に繰り返すため、余剰を蓄積することは極めて難しい状態であった。山地での生活を維持するために、山地民は物資の豊富な盆地と交易を営む必要があった。どのような商品が取り引きされていたかについての記述は歴史史料にあるが、定期市を成立させる条件は何であったのか、定期市がそもそもなぜ立つのかについては不明な点が多々ある。

この度の研究会は、「定期市はなぜ立つのか」という課題を中心に進めた。中国雲南省南部のヴェトナムと国境を接する金平県で、長年綿密な実地調査を実施してきた西谷大氏に、定期市が成立する条件やその特質について発表して頂いた。当日は他にも、ヴェトナムのアンナン山地の民で、モン・クメール系民族であるフレイ族の土着知識について報告を頂く予定であったが、発表者の急病により急遽取り止めとなったため、その時間を活用して、共同研究員全員で 2010 年度の研究会方針と成果論文集について話し合った。この話し合いは本年秋開催予定の研究会でも継続することとした。

（唐立）

報告の要旨

「多民族が暮らす雲南省者米谷の生業と市－生業戦略からみた市の成立」

中国雲南省の南でヴェトナムと国境を接する金平県の者米谷は、地政学的には中国という巨大な国家の辺境に位置する。そして山と谷がおりなす複雑な地形であり、8 つの少数民族と 1 つの集団が暮らす多民族地帯である。

者米谷は各民族・村単位で、利用する土地の生態的な環境と生業戦略が異なっている。

例えば上新寨（タイ族）の生業戦略に通底する特質は、河谷平野という特定の生態的な環境を選択、もしくは占有することで、海拔およそ800m以下の緩斜面の土地と豊富な水を利用して水田稲作に特化しつつ、野菜栽培といった生業の一部を放棄する点にある。カービエン（アール族）では、棚田の規模やその灌漑システムの精緻さと複雑さから水田稲作が中心であるかのように見える。しかし生業の重点は、水田稲作ではなく斜面畑におく。そこで野菜を盛んに栽培し、それを者米の定期市で他の民族に販売することで市での野菜販売をほぼ独占してきたことである。梁子寨瑤二隊（ヤオ族）の周辺は樹林の面積が広く、1990年代まで焼畑、水田、狩猟採集といった生業を複合的にこなってきた。1990年代に入ってから、藍の栽培と並行して草果の栽培を開始する。草果は、森林内でしかも海拔およそ1,500~2,000mの山地で栽培するのだが、これが現在の主要な換金作物となっている。彼らの生業は水田稲作や斜面畑といったある特定の生業に特化するのではなく、生態的な環境を網羅的に利用しつつ森林利用に卓越してきた点に特徴がある。

者米谷の各民族・村は多様な生態的な環境を、それぞれに多面的に利用するため、同質で差異のない生業戦略が並列的、均一的に展開しているのではなく、反対に生業戦略に独自性と差異性が存在する。そしてその差異性は定期市＝交易を介することでより促進されてきた。つまり者米谷では、生態的な環境の差異性を生業戦略の差異性に転化することで、多様な生業戦略が集合し相互に補完しあう「生業複合体」を形成している。さらに各民族・村の生業戦略と市が作る生業複合体は、人が生態環境の差異を生業の差異に転化し生業の差異から生まれる生産物の差異を市を介することで交換し、そこから利潤を生み出す市場メカニズムが基礎になっている。

人間の生活世界は、生態的な環境だけが人間の行動を制約しているわけではなく、環境利用、生業、そして、市場メカニズムは、1つのものが独立して存在しているのではない。これらを取りまく歴史性などさまざまな要素のなかで、相互の関係性と絡み合いながらそれぞれが決定されている。生活世界を形成しているさまざまな要素の相互の関係性を理解することが、地域社会の根本的なシステムを理解することにつながると考えられる。

（西谷大）

質疑応答

西谷氏が提供した大量かつ極めて綿密な調査資料は、者米谷と呼ばれる河谷盆地の定期市のみならず、ハニ、アール、ヤオ、ミャオ、クーツォンの山地民が営む生業戦略をも網羅している。その資料に基づいて西谷氏は、「生態的な環境の差異を利用することから、生業の差異が生じ、生業の差異」によって、交換と市システムが生み出されたという仮説を立てている。質疑応答はこの市場メカニズムの生起仮説とその関連課題に集中し、活発に行なわれた。市場メカニズムの生起には、情報交換の役割はなかったのか、また市場の位置が時代によって変更するかなどの質問があった。また、生態環境の差異について、灌漑システムにみられる水路管理は完全に生態環境で説明しきれるのかといった疑問が出さ

れた。者米谷の事例だけではなく、別の事例においても、ヤオ族は個人で水路管理を行なう特徴が知られていることから、その管理方法が可能な生態環境をヤオ族自身が選択するといった各民族の社会的要素も働いているのではないかという意見であった。

さらに、参加者から、西谷氏が指摘する標高 800 メートルの米穀自給ラインという生態的制限が、山地民とタイ族の歴史を考える上でとても重要な要素であるという発言があった。すなわち、標高 800 メートル以上では、一期作しかできないため、米穀の自給が不可能であるが、標高 800 メートル以下では水が豊富で、二期作を可能にし、米穀の余剰があるため、定期市を通じて盆地から山地民へ米穀が供給される措置も生態環境と関係しているという指摘である。盆地のタイ系民族は山地への穀物供給を操作することによって山地民を「統制」したという歴史事実の解釈には、生態環境的要因を入れる必要があるとの含みをもつ指摘でもある。(唐立)